

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

至学館大学

2026年度 一般入学者選抜試験後期

国語

〈注意事項〉

- 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。
 - 受験番号欄
受験番号（数字及び英字）を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
 - 氏名欄
氏名を記入しなさい。
 - 解答科目欄
解答する科目名の左の○にマークしなさい。マークされていない場合又は複数の科目にマークされている場合は、0点となります。
- 試験時間は60分です。
- この問題冊子は、18ページあります。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように問題番号10の解答記入欄の③にマークしなさい。

問題番号	解答記入欄
10	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
- 不正行為について
 - 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
 - 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退出させます。
- 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国語 一般入試 (後期)

第1問 次の〔文章Ⅰ〕〔文章Ⅱ〕を読み、後の問い(問1～問10)に答えよ。(文章は設問の関係から一部変更している)

〔文章Ⅰ〕若年性アルツハイマー型認知症当事者の丹野智文さんも、私によるインタビューのなかで、同じようなことを話しています。

助けてって言うてないのに助ける人が多いから、イライラするんじゃないかな。家族の会に行っても、家族が当事者のお弁当を持ってきてあげて、ふたを開けてあげて、割り箸を割って、はい食べなさい、というのが当たり前だからね。「それ、おかしくない?できるのになぜそこまでするの?」って聞いたたら、「やさしいからでしょ」って。「でもこれは本人の自立を奪ってない?」って言うたら、一回怒られたよ。でも僕は言い続けるよ。だってこれをずっとやられたら、本人はどんどんできなくなっちゃう。

認知症の当事者が怒りっぽいのは、周りの人が助けすぎることからなんじゃないか、と丹野さんは言います。何かを自分でやろうと思うと、先回りしてばつとサポートが入る。お弁当を食べるときにも、割り箸をばつと割ってくれるといったように、やってくれることがむしろ本人たちの自立を奪っている。病気になったことで失敗が許されなくなり、挑戦ができなくなり、^(a)自己肯定感が下がっていく。丹野さんは、⁽¹⁾周りの人のやさしさが、当事者を追い込んでいると言います。

ここに圧倒的に欠けているのは、他者に対する信頼です。目が見えなかつたり、認知症があつたりと、自分と違う世界を生きる人に対して、その力を信じ、任せること。やさしさからつい先回りしてしまうのは、A ことの裏返しだともいえます。

社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだ論じています。どちらも似た言葉のように思えますが、ある点において、ふたつはまったく⁽²⁾逆のベクトルを向いているのです。

その一点とは⁽³⁾「不確実性」に開かれているか、閉じているか。山岸は『安心社会から信頼社会へ』のなかで、その違いをこんなふうに語っています。

信頼は、社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることを意味しています。

安心は、相手が想定外の行動をとる可能性を意識していない状態です。要するに、相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じている。

それに対して、信頼とは、相手が想定外の行動をとるかもしれないこと、それによって自分が不利益を被るかもしれないことを前提としています。つまり「社会的不確実性」が存在する。にもかかわらず、それでもなお、相手はひどい行動をとらないだろうと信じること。これが信頼です。

つまり信頼するとき、人は相手の自立性を尊重し、支配するのではなくゆだねているのです。これがないと、ついつい自分の価値観を押しつけてしまい、結果的に相手のためにならない、というすれ違いが起こる。相手の力を信じることは、利他にとって絶対的に必要なことです。

私が出産直後に数字ばかり気にしてしまい、うまく ア ジュニユウでできなかったのも、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

もちろん、安心の追求は重要です。問題は、安心の追求には終わりがありません。一〇〇%の安心はありえない。

信頼はリスクを意識しているのに大丈夫だと思っただけで、不合理な感情だと思われるかもしれません。しかし、この安心の終わりのなさを考えるならば、むしろ、「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほうが、(4) 合理的であるということができます。

利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という「私の思い」が含まれています。

重要なのは、それが「私の思い」でしかないことです。

思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分からない。「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべきだ」

になるとき、利他の心は、容易に相手を支配することにつながってしまいます。

つまり、利他の大原則は、「自分の行為の結果はコントロールできない」ということなのではないかと思えます。やってみて、相手が実際にどう思うかは分からない。分からないけれど、それでもやってみる。この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。

「自分の行為の結果はコントロールできない」とは、別の言い方をすれば、「見返りは期待できない」ということです。「自分がこれをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」という押しつけが始まる時、人は利他を自己犠牲ととらえており、その見返りを相手に求めていることとなります。

私たちのなかにもつい芽生えてしまいがちな、見返りを求める心。先述のハリファックスは、⁽⁴⁾ ケイシヨウを鳴らします。「自分自身を、他者を助け問題を解決する救済者と見なすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己陶醉へと傾きかねません」

(『Compassion』)。

アタリの言う合理的利他主義や、⁽⁵⁾ 「情けは人のためならず」の発想は、他人に利することがめぐりめぐって自分にかえつてくると考える点で、他者の支配につながる危険をはらんでいます。ポイントはおそらく、「めぐりめぐって」というところでしょう。めぐりめぐっていく過程で、私の「思い」が「予測できなさ」に吸収されるならば、むしろそれは他者を支配しないための想像力を用意してくれているようにも思います。

〔文章Ⅱ〕私が先日ある方から聞いた組織のあり方は違っていました。その方は、農場と宿泊施設とレストランが一体となった施設を運営されているのですが、その施設をつくる際、内装のデザインをお願いしていた人が、たまたま料理についても非常によいアイデアを持っていることに気がつきました。そこで、その内装デザイナーも、レストランのメニュー開発のチームに加えたのだそうです。

内装デザイナーが料理についてのよいアイデアを持っていることが分かったのは、おそらく厳格な会議の議事進行のなかでは

なく、ふいの雑談のような場であつたでしょう。当初の計画とは違つていても、よい芽があれば、その可能性をきちんとケアする。こうしたことは、この組織に、計画外を受け入れる「余白」があつたからこそできたことでしょう。ここは人に対する確かな信頼があります。

ブルシット・ジョブ（注1）について指摘したグレーバーは、あらゆる人間的な仕事は本質的にはケアリングであると指摘しています。川に橋をかけるのは、そこを渡りたいと思う人をケアするためでしょう。改札が自動化しても駅員が待機しているのは、重い荷物を持った人やその土地に不案内な観光客をケアするためでしょう。

ところが、人々が数字のために働き、組織が複雑化して余白を失つていくにつれて、仕事からケアが失われていきます。「仕事のケアリング的な価値が、労働のなかでも数量化しえない要素であるようにみえる」（『ブルシット・ジョブ』）からです。その先にあるのは、自分がなんのために働いているのか、利他の宛先のない、虚しい労働むなでしょう。仕事は、ただ生活の糧を得るためだけの手段になつてしまふでしょう。

さて、ここまで「利他」という問題について、さまざまな論者の考えや具体的な事例に則して考えてきました。そのなかで、利他とは、「聞くこと」を通じて、相手の隠れた可能性を引き出すことである、と同時に自分が変わることである、というポイントがみえてきました。そして、そのためには、こちらから善意を押しつけるのではなく、むしろうつわのように⁽⁶⁾「余白」を持つことが必要である、ということも分かつてきました。

最後に確認しておきたいのは、利他というときの「他」は人間に限られるべきではない、ということことです。人間の経済活動の結果起こつた環境破壊が深刻になっているいま、私たちは、⁽⁷⁾人間以外の生物や自然そのものに対するケアのことを考えなくてはなりません。

（注1）ブルシット・ジョブ…無意味で不必要で有害な仕事。

（伊藤亜紗編『利他』とは何か）

問1 文中の傍線部(ア)・(イ)を漢字に直したとき同じ漢字を用いるのはどれか。後の①～⑤から一つずつ選べ。

(ア) ジュニユウ……………問題番号 1

- ① 国交をジュリツする。
- ② 異文化をジュヨウする。
- ③ 消費者のジュヨウに応じる。
- ④ 卒業証書をジュヨする。
- ⑤ この電球はもうジュミヨウだ。

(イ) ケイショウ……………問題番号 2

- ① 寺のハンショウが鳴る。
- ② 老人がビョウショウについている。
- ③ 長年の功勞をケンショウする。
- ④ 船がザンショウを浴びて光る。
- ⑤ 日頃のストレスをカイショウする。

問2 文中の傍線部(a) 自己肯定感の意味として正しいものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 3

- ① 自分自身の考えが正しいと勇気を持つて主張できること。
- ② 自分自身が他者より優れていると考えて得意になること。
- ③ 自分自身が失敗することはないと自信を持つこと。
- ④ 自分と相手の双方を互いに思いやり認め合うこと。
- ⑤ 自分自身の価値や能力を好意的に認めること。

問3 文中の傍線部(1) 周りの人のやさしさが、当事者を追い込んでいるとあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 4

- ① 助けてと言っていないのに周りの人が助けすぎて、皆が怒りっぽくなってしまふから。
- ② 助けられることにより、本人が自立しようとしてもできなくなってしまうから。
- ③ 病気になることで挑戦ができなくなり、自己肯定感が下がってしまったから。
- ④ 先回りして助けられるので、思っていたことと違って受け入れざるを得ないから。
- ⑤ 先回りされることで自己肯定感が下がり、当事者が追い込まれているから。

問4 文中の空欄 A に入るべき最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 5

- ① その人を嫌悪している
- ② その人に頼っている
- ③ その人に安心している
- ④ その人を肯定している
- ⑤ その人を信じていない

問5 文中の傍線部⁽²⁾「逆のベクトルを向いている」とあるが、本文にあてはめるとどのようなことか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号

6

- ① 信頼と安心とが異なった解釈をされていること。
- ② 信頼と安心とが異なった方向へと進歩していること。
- ③ 信頼と安心とが異なった方向の性質を持っていること。
- ④ 信頼と安心とが異なった文化を背景にしていること。
- ⑤ 信頼と安心とが異なった行動へと相手を導いていること。

問6 文中の傍線部⁽³⁾「不確実性」に開かれているとあるが、具体的にはどのようなことか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号

7

- ① 相手の人間性のゆえに、ひどい行動はとらないだろうと考えること。
- ② 相手が想定外の行動をとる可能性を意識せず、全て信頼していること。
- ③ 相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると信じ、安心すること。
- ④ 相手が想定外の行動をとるかもしれないが、それでも信頼すること。
- ⑤ そもそも社会的不確実性が存在していないと感じ、安心すること。

問7 文中の傍線部(4)「合理的である」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号

8

- ① 相手の力を信じることは、安心にとって絶対的に必要であるから。
- ② 安心の追求には際限がなく、どこかでリスクを許容せざるを得ないから。
- ③ 安心の終わりのなさを考えた場合、信頼は不合理な感情であるから。
- ④ 信頼はリスクを意識しているはずであるのに、大丈夫だと考えてしまうから。
- ⑤ 利他的な行動には、本質的に自分の思いが込められているものであるから。

問8 文中の傍線部(5)「情けは人のためならず」とあるが、これはどのような意味で用いられているか。最も適当なものを次の

①～⑤から一つ選べ。

問題番号

9

- ① 親切な行いは一人のためであったとしても、全ての人を幸福にすること。
- ② 人に親切にして甘やかすことは、結局その人のためにならないということ。
- ③ 他者に利を与えると、めぐりめぐって自分が損をしてしまうということ。
- ④ 人に親切にすると、いつかよい報いとなって自分に返ってくるということ。
- ⑤ 人に親切にすることがめぐりめぐって他者に支配されることにつながるということ。

問9 「文章Ⅱ」の傍線部⁽⁶⁾「余白」を持つとあるが、これはどういうことか。「文章Ⅰ」における筆者の主張をふまえ、最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 10

- ① これをしてあげたら相手が喜ぶだろうと考えることは「私の思い」に過ぎないので、自分からは何もせずに相手の自主性を尊重して、相手の行動にたくさんの余白を求めていくこと。
- ② 自分の行為の結果はコントロールできないので、大きな失敗をしないうちに様々な方法を切り替えて試すことができるよう、修正の余地をたくさん残しておくこと。
- ③ 自分の価値観を押しつけるのではなく、相手が想定外の行動をとるかもしれないことを前提にして、それでもなお相手を信頼して見返りを求めない心の余地を持つこと。
- ④ 安心の終わりのなさを考えたとき、むしろ「ここから先は相手を信じよう」と判断して、自分と相手を含めた全ての行為の結果を考えないようにする心の余裕のこと。
- ⑤ たとえ善意の押しつけになったとしても、むしろ水をためるうつわのように、拒否されても何度でも同じ利他の行いをくり返して、相手に尽くす心の広さのこと。

問10 「文章Ⅱ」の傍線部⁽⁷⁾「人間以外の生物や自然そのものに対するケアとあるが、どのようにしたらよいか、学生a～eが意見を述べ合った。これらのうち、「文章Ⅰ」「文章Ⅱ」における筆者の考えに最も近いものを、後の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 11

学生 a こうすれば自然を守ることができるはずだといった、人間の勝手な思い込みを捨て、自然に対する捉え方から考え直して、人間自身が変わっていくことが大切ではないかしら。

学生 b いや、自然は自分の考えを外に向けて表現することができないから、ある程度は人間が自然のためになることを考えて、実行してあげる必要があると思うよ。

学生 c いいえ、それこそ勝手な思い込みよ。自然をコントロールしようなどと考えず、自然の自立性を信頼して、最初から何もせずに放任していくことが一番大切なよ。

学生 d それでは人間自身が自然災害の犠牲になってしまうよ。自然と闘ってある程度自然を支配していくことは、他の生物の生存にも必要なことで、これは利他の心に通ずるはずだよ。

学生 e 世界中の人間が利他の精神を持って話し合い、心を一つにして環境破壊を防がなければならない。そして自然や他の生物と協調し、共生して地球を守っていくんだ。

- ① 学生 a ② 学生 b ③ 学生 c ④ 学生 d ⑤ 学生 e

第2問 次の文章は寺山修司『プロレスラー ジャイアント・馬場（注1）』の一節である。よく読んで後の問い（問1～問9）に答えよ。（文章は設問の関係から一部変更している。）

馬場正平は昭和十三年一月二十三日に新潟県三条市の四日町で生まれた。実家は八百屋である。生まれた時の体重は七五〇匁（注2）の標準体重であった。

小学校へ入る頃は、クラスでいちばん小さい方だったと言うから、⁽¹⁾突然の発育ぶりに母親のミツさんが「奇蹟」を感じるのも無理はない。ミツさんは馬場の肉体の発達ぶりを、ガダルカナル島で死んだ長男正一の生まれ変わりだと思っているのである。

正一の死後、遺品の絵の道具を正平が貰った。少年時代の正平は、おとなしい「絵を書く少年」だったのである。

ミツさんは、兄の分まで大きくなった正平の足の大きさを画用紙にかき、それを持って浅草まで長靴を買いに行っていたが、浅草にも正平にあう長靴はなかったと言う。

そこで、馬場は「靴」を通じてアメリカの牧師と友人になった。大足の牧師と少年とは、だんだん仲良くなり、正平の中学二年の時、⁽²⁾ついに正平は晴れた川の中で「洗礼」を受けたのである。（だから馬場は現在でも、聖書を（a）座右の書の一つに加えている。）市立第一中学時代には卓球が得意で、校内大会でも何度か優勝し、三条実業では超高校級の剛球投手として野球部に（b）クンリンした。

野球部時代にはこんなエピソードもある。始めて部員のスパイク靴を作ったときに生徒がガヤガヤ騒いでいる。監督の先生が何事かと思っ行ってみると一人の生徒が、

「先生、このスパイクを見てください」

と馬場のスパイクを差出した。先生も ^A流石にギョツとして、

「二寸貸せ。 ^B校長先生に見せてくれるから」

と教室へとんで行ってしまった。野球部長の渡辺剛先生も校長も、あんまり大きいので ^Cあいた口がふさがらず、ウーンとうなる

だけだった。やがて十四文(注3)スパイク靴が校長先生の机の上に飾られ、先生たちがゾロゾロと校長室まで見物にやって来た。学校中がこの(3)ユーモラスな靴事件に大騒ぎし、馬場はテレながら嬉しそうにスパイク靴をみがいっていたと言う。

馬場の運動神経が抜群だったために、高校二年で巨人軍の皆川スカウトにプロ入りを勧誘されたときにも「町中が、馬場の成功を疑わなかった」ものである。(中略)

馬場は二軍の合宿時代から酒も煙草もやらずに練習に熱中したが、巨人軍は馬場にとって必ずしも「陽の当たる場所」ではなかったようだ。

コーチだった谷口五郎は「手が大きすぎてタマが引掛からないので、思ったほどスピードが出なかった」と言い、中上英雄(旧姓藤本)は「上半身にくらべると下半身が弱かったので、ジャンプするたびに、自分の重さで足首をくじいていた」と言っている。

私は、当時の馬場の話をいろいろ訊きながら、馬場がなぜか「素晴らしい肉体」をテレかくしにしながら生きていたように思われてならない。

たとえば合宿の建物——合宿の鴨居(注4)は他の選手にあわせて作つてあるので、馬場がウツカリ通るとゴツン！と頭をぶつつける。そこでぶつからないために、馬場は体をちぢめて通るようになる。平凡な肉体にあわせた秩序のために、平凡な肉体が(イ)エンリョがちに行動しはじめる。そして馬場はヘラクレス(注5)的な男性美を(すまなそうにして)ノロノロと(仕末する)ようになつて行つたのである。

こうして馬場は、「集団」の中で「ソガイされ、孤立して行つた。

それにひきかえ巨人軍では(6)「手段である筈の馬場の肉体を、目的として売る」ようになって行つた。

昭和三十二年五月、馬場が初登板したときの対阪神戦は五―三でリードされていた。やがて水原監督はバッターが吉田のときを(見はから)つて木戸投手から馬場にスイッチした。五尺そこそこの(中略)吉田と、六尺九寸(注6)とのマンガ的な対比に満場はドツと哄笑して湧き上がった。(しかし、苦節五年の末、やっと登つたマウンドで、馬場は自分の起用された意味をどんな心で受けとめただろうか?)

——結局、馬場は最後まで巨人軍で、「素晴らしい肉体」を手段にすることが出来ず、⁽⁷⁾つねに巨人軍のクレジットである「巨人」として話題にされた。そして、三条実業の野球部ナインたちの夢見た「プロ野球の大選手」としてではなく、巨人軍の看板男として扱われたまま。さびしく退団することになった。昭和三十四年の秋である。

(注1) ジャイアント・馬場：アントニオ・猪木と並んで、力道山なき後の日本プロレス界を牽引したスタープロレスラー。プロレスラーになる前は、プロ野球「読売ジャイアンツ」に投手として5年ほど在籍した。本名は馬場正平。

(注2) 匁：戦前日本で用いられていた重さの単位。一匁は3・75g。

(注3) 十四文：「文（もん）」は戦前使用された長さの単位。1文は約2・4cmなので、14文は約33・6cmとなる。

(注4) 鴨居：引き戸・障子などを立てる、下方に向けて溝がある横木。敷居しきの対。

(注5) ヘラクレス：屈強な肉体を有し、数々の偉業を成し遂げたギリシャ神話の英雄。ヘラクレスとも表記される。

(注6) 六尺九寸：約209cm。なお、直前に吉田の身長は「五尺そこそこ」（五尺は約150cmに相当）とあるが、吉田の実際の身長は約165cmである。

問1 文中の傍線部⁽¹⁾「突然の発育ぶりに母親のミツさんが「奇蹟」を感じるのも無理はない」とあるが、この記述から読み取ることが出来るものとして最も適当なものはどれか。次の①～⑤から一つ選べ。なお、「奇蹟」は「奇跡」に同じである。

問題番号 12

- ① 馬場の肉体の発達を超自然的なものと結びつけようとしている母親はやはり昔気質の人である、ということ。
- ② 馬場の肉体の発達は、何か人間の力以外の働きが作用していると母親に感じさせるほどだった、ということ。
- ③ 馬場の肉体は、生まれた時の体重七五〇匁から考えれば奇跡的に増加していると言っている、ということ。
- ④ 馬場の突然の発育は、戦死した長男の育ちかたと酷似しており、運命のつながりを感じざるをえない、ということ。
- ⑤ 馬場の突然の発育は、戦前の食料事情等を考慮すると、かなり稀^{まれ}なケースであったにちがいない、ということ。

問2 文中の傍線部⁽²⁾「洗礼」を受けたのである。とあるが、どういふことを言っているのか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 13

- ① 馬場は、この仲の良い牧師からかなり大きな影響を受けている、ということ。
- ② 馬場は、仲の良い牧師と、ついには一緒に川遊びをするまでになった、ということ。
- ③ 馬場は、仲の良い牧師の勧めでキリスト教の信者となった、ということ。
- ④ 馬場は、信用していた牧師からこっぴどいほどの仕打ちを受けた、ということ。
- ⑤ 馬場は、牧師と靴を通じて友人になるという珍しい体験をした、ということ。

問3 文中の傍線部(a)～(c)のここでの意味の説明として正しいものを後の①～⑤から一つずつ選べ。

(a) 座右の書……問題番号 14

- ① 身近に置いている書物
- ② 他人に推薦する書物
- ③ 最も大切にしている書物
- ④ 長年読み続けている書物
- ⑤ 読破できていない書物

(b) 仕末する……問題番号 15

- ① 緩慢な動きをする
- ② 人目を避けるようにする
- ③ 人に見られないようにする
- ④ じゃばらないようにする
- ⑤ なかったかのようにする

(c) 見はからって(見はからう)……問題番号 16

- ① 交代時期を失う
- ② 周囲の意見に従う
- ③ 観客の受けを狙う
- ④ 適切な時期を選ぶ
- ⑤ 偶然の機会を待つ

問4 文中の(ア)～(ウ)はすべて二字熟語であるが、「上の漢字」と同じ漢字が使用されている熟語と、「下の漢字」と同じ漢字が使用されている熟語を記号で選択した場合、その記号の組合せとして正しいものはどれか。後の【共通選択肢】①～⑥からそれぞれ一つずつ選べ。

(ア) クンリン …………… 問題番号 17

〈上の漢字〉「クン」↓ (a) クン章 (b) クン告 (c) 諸クン
 〈下の漢字〉「リン」↓ (a) リン理 (b) リン時 (c) 善リン

(イ) エンリョ …………… 問題番号 18

〈上の漢字〉「エン」↓ (a) 望エン (b) 支エン (c) エン命
 〈下の漢字〉「リョ」↓ (a) 捕リョ (b) リョ団 (c) 無リョ

(ウ) ソガイ …………… 問題番号 19

〈上の漢字〉「ソ」↓ (a) ソ求 (b) ソ遠 (c) ソ飯
 〈下の漢字〉「ガイ」↓ (a) ガイ悪 (b) 気ガイ (c) ガイ交

【共通選択肢】

- ① 〈上の漢字〉が(a)、〈下の漢字〉が(b)
- ② 〈上の漢字〉が(a)、〈下の漢字〉が(c)
- ③ 〈上の漢字〉が(b)、〈下の漢字〉が(a)
- ④ 〈上の漢字〉が(b)、〈下の漢字〉が(c)
- ⑤ 〈上の漢字〉が(c)、〈下の漢字〉が(a)
- ⑥ 〈上の漢字〉が(c)、〈下の漢字〉が(b)

問5 文中の傍線部⁽³⁾「ユーモラスな靴事件」とあるが、二重傍線部A～Eのうち、この「事件」に該当しないものはどれか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

- ① A 流石にギョツとして
- ② B 校長先生に見せてくる
- ③ C あいた口がふさがらず
- ④ D 校長室まで見物にやって来た
- ⑤ E プロ入りを勧誘された

問題番号

20

問6 文中の傍線部⁽⁴⁾「巨人軍は馬場にとって必ずしも「陽の当たる場所」ではなかったとあるが、どういことを言っているのか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

- ① 巨人軍は馬場にとって、自分の才能を発揮できる場とは言い難かった、ということ。
- ② 巨人軍は馬場にとって、自らの才能が否定される場ではなかった、ということ。
- ③ 巨人軍のコーチには、馬場を丁寧に指導しようという姿勢が見られなかった、ということ。
- ④ 巨人軍のコーチは、選手の欠点は指摘するが、改善法の提示は一切なかった、ということ。
- ⑤ 巨人軍は、酒や煙草をやめたぐらいで簡単に一軍に上げられるほどのチームではなかった、ということ。

問題番号

21

問7 文中の傍線部⁽⁵⁾「素晴らしい肉体」をテレかくしにしながら生きていたとあるが、どういことを言っているのか。最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号

22

- ① 馬場は、「素晴らしい肉体」を隠れ蓑^みとして、本心を悟られないようにしていた、ということ。
- ② 馬場は、鴨居の高さに自分を合わせ、「素晴らしい肉体」の存在を忘れようとしていた、ということ。
- ③ 馬場は、「素晴らしい肉体」を誇るどころか、どこか恥ずかしいものと感じていた、ということ。
- ④ 馬場は、自分の肉体がそれほどでもないことを思い知り、恥ずかしい思いにとらわれていた、ということ。
- ⑤ 馬場は、自分の能力がプロでは通用しないことを悟り、照れ隠しになるものを探していた、ということ。

問8 文中の傍線部⁽⁶⁾「手段である筈の馬場の肉体を、目的として売る」とあるが、どういふことを言っているのか。最も適当

なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 23

- ① 馬場の肉体を手段として集客を図る筈だったが達成が困難となった、ということ。
- ② 馬場の肉体はもともと手段に過ぎず、目的とするには不向きだ、ということ。
- ③ 馬場の肉体は大切な目的であり、手段とすることは予定されていなかった、ということ。
- ④ 馬場の野球の実力ではなく肉体そのものを集客の手段にする、ということ。
- ⑤ 馬場の肉体は本来は目的であり、手段とする考え方を見直すべきだ、ということ。

問9 文中の傍線部⁽⁷⁾「巨人軍のクレジットである「巨人」として話題にされた」とあるが、どういふことを言っているのか。

最も適当なものを次の①～⑤から一つ選べ。

問題番号 24

- ① 馬場は、巨人軍の人気を保証するためだけの存在としてのみ扱われ続けた、ということ。
- ② 馬場は、巨人軍の看板として期待されたが、その期待に応えることはできなかった、ということ。
- ③ 馬場は、地元新潟の人たちが夢見た「プロ野球の大選手」には結局なれなかった、ということ。
- ④ 馬場は、自らの「素晴らしい肉体」を生かすことなく巨人軍を去ることになった、ということ。
- ⑤ 馬場は、球団名である「巨人」を具現化した存在としてしか話題にされなかった、ということ。